

住民参加型「田んぼの草花調査」手法の開発

研究のポイント

多面的機能支払交付金(旧農地・水・環境保全向上対策)などでの「生きもの調査」活動を想定し、植物知識の多寡に関わらず、参加者の誰もが満足できるような方法を開発しました。

研究の背景

- 「生きもの調査」は、農村が有する生物との触れ合いから、農業や農村への住民の理解を促進します。
- 水田畦畔にみられる「草花」は、カエルや昆虫などの生息に大きな影響を及ぼしています。
- 魚類やカエルなど動物の調査法の提案はありましたが、畦畔の草花についてはありませんでした。

手法の概要

本手法の概要は右図のとおりで以下の特徴を有します。

- 新たに開発したポケット版の専用図鑑を用いることにより、全国の畦畔で草花調査が可能
- 参加者の人数や属性、植物知識の多寡に応じて、調査活動プログラムを簡便に設計可能
- 調査票の工夫や地域の植生の健全度を図る指標の提示により、継続的な調査活動への参加モチベーションを高めることが可能

適用事例

宮城県大崎市の6地区で本手法を適用したところ、全確認草種の6～8割程度が専用図鑑の掲載種で、参加者からは高い満足度が得られました。

開発した「田んぼの草花調査」手法の適用

	地 区	A	B	C	D	E	F
実施月日		7/20	7/20	8/23	8/23	8/24	9/10
参加人数(うち子ども)		26(15)	12(0)	24(15)	18(12)	6(3)	5(0)
適用プログラム		P6	P6	P6	P6	P5	P4
全確認草種 ^{注1)} (A)		42	63	50	57	48	55
うち専用図鑑掲載種(B)		26	45	37	39	41	44
うち参加者の確認種(C)		16	24	31	33	28	38
(B)÷(A)		62%	71%	74%	68%	85%	80%
(C)÷(A)		38%	38%	62%	58%	58%	69%
参加者の満足度 ^{注2)}		—	—	90%	75%	100%	80%

注1: 対象畦畔の事後調査で観察された全種数。

注2: 事後アンケート(高校生以上)で、「満足」の感想が得られた割合。

